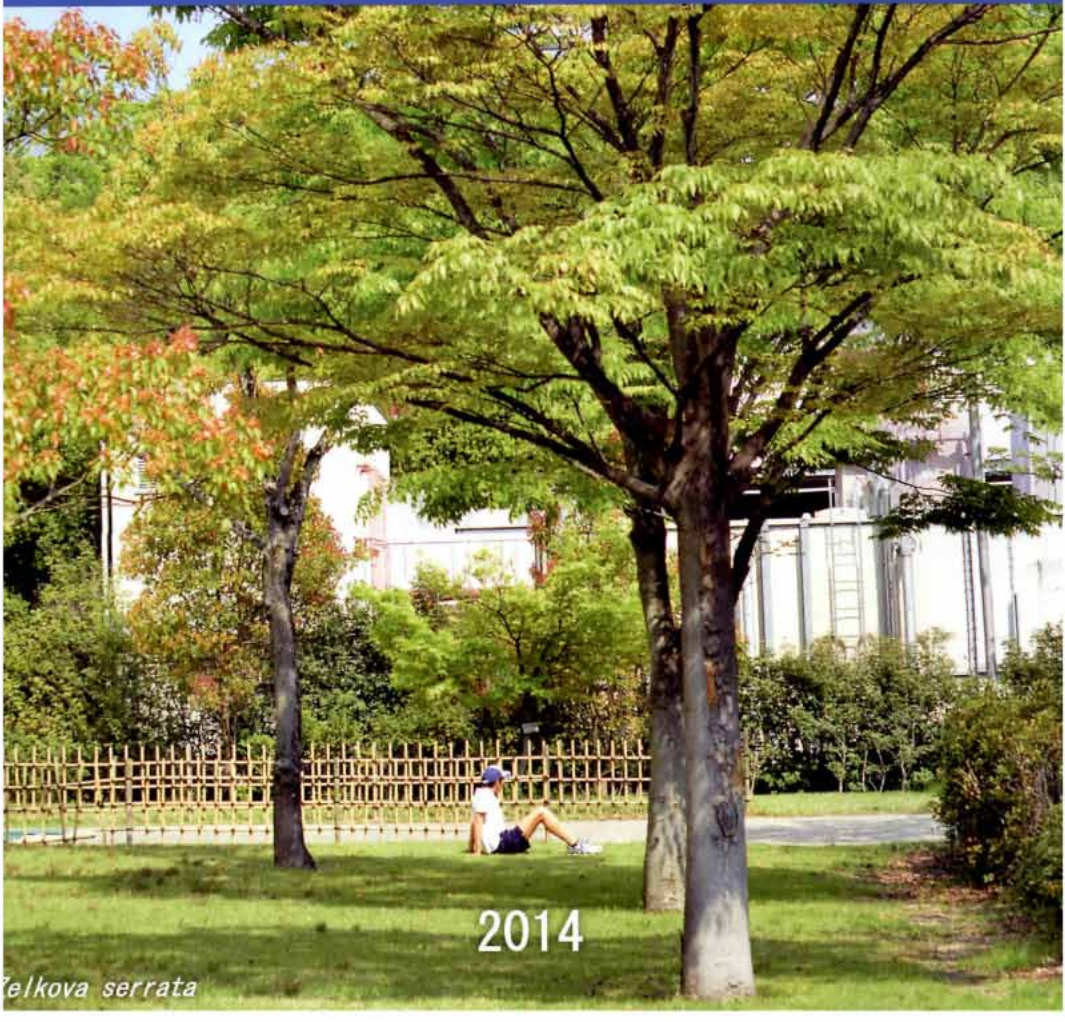
福山大学
FUKUYAMA UNIVERSITY

新入生にすすめる 50冊の本



2014

elkova serrata

[表紙写真：ケヤキ並木の下で]

大学のシンボル「欅（ケヤキ：学名 *Zelkova serrata*）」をモチーフに、福山大学のシンボルマークが制定されています。大学構内のそこかしこに、ケヤキの木が元気に育っています。春四月、大学１号館前庭のケヤキ並木の芝生には、５葉の新芽が芽吹いていました［裏表紙写真：芽吹き］。鳥が羽ばたくように、若々しく、たくましく育っていくことを願っています。

写真提供：　西尾　廣昭（薬学部・教授）

撮影場所：１号館前庭・欅並木

人生の伴侶

皆さん、ご入学誠におめでとうございます。現在の皆さんの胸中には何が芽生えているのでしょうか。これまでは、自分の思ったことがなかなか出来なかったということは、ないでしょうか。「良く学び　良く遊べ」という言葉を聞かれたことがあると思います。思う存分勉強し、心残すことなく遊ぶ。それはどのようにして可能であるのか。そのような人生を送った人はいるのでしょうか。

この「新入生にすすめる50冊の本」の小冊子は、本学の教員、職員、学生が、おすすめの本を紹介したものです。皆さんが書店を訪ねたとき、何か新しいものを発見することはないでしょうか。若き皆さんにとって、知りたいこと、やってみたいこと、訪ねてみたいところ、読んでみたい本、食べてみたい料理など、きっとあるのではないでしょうか。「初心忘るべからず」という言葉があります。初心に自分の思いが凝縮されていると考えることができるのではないかと思います。この小冊子から、学びのヒント、遊びのヒント、生き方のヒントが得られるかも知れません。

『新入生にすすめる50冊の本』刊行委員会

人生の道しるべ

あなたは相手に対して、どう接していますか？
相手を気づかえていますか？　青山佳代
『100％好かれる1％の習慣』松澤萬紀著　……1

『坂の上の雲』の時代を学ぶ　金丸純二
『「坂の上の雲」と日露戦争』佐木隆三ほか著　……2

不屈の精神、たゆまない熱情　北口博隆
『木を植えた男』ジャン・ジオノ原作　……3

古今東西、素晴らしい名言を英語で楽しもう！　清水　光
『人生に前向きになる英語の名言101』寺沢美紀著　……4

10年後にもう一度読むために、今、読む本　田中始男
『ワーク・シフト』リンダ・グラットン著　……5

20代からの国際派プロフェッショナルへの道　中村　博
『世界級キャリアのつくり方』黒川清，石倉洋子著　……6

こんなはずじゃなかったと思うときはだれでも来ます
そんな時、特に新入生のみなさんに
是非読んでいただきたい本です　平松智子
『置かれた場所で咲きなさい』渡辺和子著　……7

あなたの魂を揺さぶります！　松田文子
『夜と霧』ヴィクトール・E.フランクル著　……8

今を楽しく生きることも大切。
未来を考えて今を生きるのも大切。　横山恵理
『二十歳までに考えておきたい12のこと』近藤卓編著 ・・・・・9

笑い話が70% 大切な何か30%。
多才で多彩な大泉洋の大学時代から今。ちょっと未来？
渡辺未来
『大泉エッセイ』大泉洋著 ・・・・・・・・・・10

学びの道しるべ

新入生は、「レポート」を書くよう求められます。
4年生になると論文を書くよう求められます。ご一読を!
泉　潤慈
『論文・レポートの基本』石黒圭著 ・・・・・・・・・・11

いまさら人に聞けないことも教えてくれる
読んで楽しい一冊です　大谷恭子
『調理以前の料理の常識』渡邊香春子著 ・・・・・・・・・・12

ガンダムのスペースコロニーを作りたくて理系へ進んだ
お姉さんのこと知りたくないですか？　片桐重和
『理系なお姉さんは苦手ですか?』内田麻理香著 ・・・・・・・13

わしゃあ“広島人”じゃけえ　桑田成年
『広島学』岩中祥吏著　……14

イメージや思い込みで物事を判断していませんか?
―根拠に基づいて、正しく判断する考え方を学びましょう―
塩見浩人
『京大医学部の最先端授業!「合理的思考」の教科書』
中山健夫著　……15

日本語ってこんなふうになってたの!?
笑って学べるコミックエッセイ!!　下村則恵
『日本人の知らない日本語』蛇蔵，海野凪子著……16

日本と中国は競合関係ではなく、補完関係です。　鐘　一君
『共存共栄の日中経済』関志雄著　……17

グループディスカッションの方法が分かる。だけじゃない
中﨑千尋
『ザ・ファシリテーター』森時彦著　……18

「全体は非真理である」
―偽りにみちた社会にだまされないために
個我の力を鍛えよう―　原　千史
『ミニマ・モラリア』テーオドル・W.アドルノ著……19

今更、あえて古典的受験参考書を!
学生たちと教員とで創りたい大学での教育へのヒント
南　卓志
『古文の読解』小西甚一著 ……20

こころの道しるべ

ねたみとそねみが歴史を変える　金尾義治
『嫉妬の世界史』山内昌之著 ……21

涙を流さずにはいられない、
そして幸せというものについて熟考してしまう・・・名作です
小嶋英二朗
『アルジャーノンに花束を』ダニエル・キイス著 ……22

人間は本能の壊れた動物である
答が一つのクイズ＝受験勉強から、
自分で考え、独自に解釈する学問へ　重迫隆司
『ものぐさ精神分析』岸田秀著 ……23

対話が癒しになる見事な見本　田中久男
『村上春樹、河合隼雄に会いにいく』
河合隼雄，村上春樹著 ……24

涙と関わりのない人生は、
とても薄っぺらなものなのかもしれません　藤居尚子
『涙の理由』重松清，茂木健一郎著　……25

「こころ」を見つめ直す・・・
ユング心理学者が導く
「借りぐらしのアリエッティ」原著の深層　水上　愛
『ファンタジーを読む』河合隼雄著　……26

相手の心を開く鍵はあなたが握っている　渡邉有紀子
『聞く力』阿川佐和子著　……27

科学の道しるべ

サリドマイドという薬がたどった数奇な運命　石津　隆
『神と悪魔の薬サリドマイド』
トレント・ステフェン，ロック・ブリンナー著　……28

タフで、楽しくて、そして泣ける科学者人生の話　井上敦子
『小さな小さなクローディン発見物語』月田承一郎著　……29

毛のないけもの＝人間、という動物のおはなし　川上さおり
『人間はどういう動物か』日高敏隆著　……30

科学は面白くなくてはならない!
破天荒なノーベル賞物理学者、
リチャード・ファインマンの自伝　伍賀正典
『ご冗談でしょう、ファインマンさん 1』
リチャード・P. ファインマン著　……31

現役獣医師が多様化するペット医療の
知られざる現場を描く　高橋佳美
『珍獣の医学』田向健一著　……32

宇宙の不思議に迫ってみよう
それはあなたの人生を豊かにする　田中　聡
『重力とは何か』大栗博司著　……33

ある道具をうまく使えなかったら
それはあなたのせいではなくて
道具のデザインが悪いせいである　中道　上
『誰のためのデザイン?』D.A.ノーマン著　……34

こころの座と言われる脳の魅力に引き込まれます！
平　伸二
『進化しすぎた脳』池谷裕二著　……35

近年のゲノム科学の急激な発展により
ヒトのＹ染色体がアフリカを出てから変質しながら
全世界に広がる軌跡を追うことができるようになった
藤田泰太郎
『Ｙ染色体からみた日本人』中堀豊著 ……36

現代医学の目からみた徳川将軍家十五代
残された記録文書から歴代将軍の健康状態や死因を読み取る
満谷　淳
『徳川将軍家十五代のカルテ』篠田達明著 ……37

生命である人間が「生命とは何か?」という問題を解けるか?
吟遊科学者と高校生の対話 山口泰典
『世界をやりなおしても生命は生まれるか?』長沼毅著 ……38

建築構造設計の実務者らが書いた事典で
日頃の経験から得た知識をもとに
平易な言葉で説明されています 山田　明
『建築構造用語事典』日本建築構造技術者協会
関西支部建築構造用語事典編集委員会編著 ……39

文学の道しるべ

もののけ姫と弁証法　井上矩之
『もののけ姫・完全版』宮崎駿脚本・監督　……40

読み終わった後に想像が膨らむ一冊!
繰り返し読みたくなる小説です　片山佳織
『白夜行』東野圭吾著　……41

何事にも先達はあらまほしきもの　古島義雄
『松尾芭蕉『おくのほそ道』100分de名著』長谷川櫂著…42

「三顧の礼」「水魚の交わり」を学ぶ　清水厚實
『中国詩心を旅する』細川護熙著　……43

歴史は創られるものなのか　田中哲郎
『史記列伝』司馬遷著　……44

「時間よ止まれ、お前は美しい!」一人生の価値とは何か?
冨士彰夫
『ファウスト』ゲーテ作　……45

気軽に楽しむ「徒然草」　藤岡晴人
『徒然草』兼好著　……46

『砂糖でできた弾丸では子供は世界と戦えない』
直木賞作家が描く死から始まる青春ジュブナイル　藤原直希
『砂糖菓子の弾丸は撃ちぬけない』桜庭一樹著 ……47

「戦争の時代」を鮮やかに伝えてくれる一冊
愛と笑いと勇気の物語　馬成三
『少年H』妹尾河童著 ……48

『悪の教典』作者が描く、いびつなニホン
人間の姿をした“何か”と
動物の姿をした“何か”の物語（アニメ作品も）　松原尚寛
『新世界より 上』 貴志祐介著 ……49

私たちがまだ幼く純粋だった頃の思い出のお話　山中友貴
『誕生日の子どもたち』トルーマン・カポーティ著 ……50

備考：学生の所属は平成26年3月現在です。

あなたは相手に対して、どう接していますか？
相手を気づかえていますか？

『100%好かれる 1%の習慣』
松澤萬紀 著（ダイヤモンド社）

客室乗務員を 12 年された著者が 500 万人のお客様を対応し学んだ人間関係の法則。

それを元に人間関係の悩みを解決させるヒントが書かれています。

例えば、有名人が飛行機に乗って来た時のこと、その時の気づかいに一瞬で魅了されファンになってしまったそうです。それは相手がどう思うか等の察する心があり、それを言葉や行動に込める習慣を持っているからだそうです。だから多くのファンに慕われているのでしょう。

そういう気づかいの出来る人は 1%でしょう。それはやろうと思えば誰でも出来る 1%の習慣です。また会いたいと思ってもらえるように行動してみませんか。

これからどんどん色んな人に出会うでしょう。

そのときの気遣い・行動・印象でご縁が生まれて人生が豊かになるかわかりません。

だから、1%だけ行動や習慣を変えて人生をもっと豊かにしていきましょう。

青山 佳代（職員）

『坂の上の雲』の時代を学ぶ

『『坂の上の雲』と日露戦争
—子規と秋山兄弟の生きた時代』

佐木隆三ほか著（山川出版社）

原作『坂の上の雲』を、当時の写真や絵等を加えながら、分かりやすく説明した本である。日本が通ってきた日清・日露戦争を取り上げるとともに、当時の戦争ではどんな道具が使われ、どんな戦術で、どのように戦かったかが説明されている。そして、多くの人が亡くなっていったのである。この史実から、当時の軍人は何を学んだのだろうか。

私は、この中で主人公の一人である秋山好古に興味を持った。別の資料で調べたのだが、彼は、学校卒業後最初は、2年間小学校に教師として、勤務しているのである。その後、軍人になり、大成功している。無事に、軍人を終えた時は、大臣にまでなっていたそうだ。にもかかわらず、この後、請われて、今で言えば、一地方の高校の校長になっているのである。彼の志はいかなるものなのか。

金丸 純二（経済学科）

不屈の精神、たゆまない熱情

『木を植えた男』
ジャン・ジオノ原作，
フレデリック・バック絵，寺岡襄訳（あすなろ書房）

これは人知れず荒れ地に30年以上にわたり木の種を植え続けた男の物語です。妻と子を失い、孤独の世界にこもりながらも、何かためになる仕事をしたい、と何の見返りも求めずに不毛の地に生命の種を植え付けます。その行いの結果、風景だけではなく空気や人の心までもが変わっていくのです。何があろうと、どんな困難に出会っても、ただひたすらに仕事に取り組んでいく姿が心に残ります。そして、人生について、環境について考えるきっかけになるのではないかと思います。とはいっても、説教臭いだけの話ではなく、心なごんだり、元気が出たり、と読むたびにいろいろな感情と出会うことができる話です。

いくつかの邦訳がありますが、絵も素晴らしいのであえて今回は絵本を紹介します。ぜひ手元に置いて、ふっと疲れた時に読んでみて欲しいと思います。

北口 博隆（海洋生物科学科）

古今東西、素晴らしい名言を英語で楽しもう!

『人生に前向きになる英語の名言 101』
寺沢美紀 著（IBC パブリッシング）

この本では、皆さんがより充実した人生を生きていくための名言が英語で書かれています。これらの中には、皆さんが知っているものが含まれているのではないかと思います。この本は、もともと英語で感動し、英語のリスニング能力を着実に伸ばすために企画されたものです。したがって、英語の名言を収めた 2 枚の CD が付いています。英語の名言 101 の内容は、成功と失敗、不思議と知恵、美と若さ、困難な仕事と決意、幸福と自由、ひらめきと志、愛と友情の 7 項目から成り立っています。ここで、幾つかの名言を紹介しましょう。世界は何をより多く必要としているのか。それは想像力である（アルベルト・アインシュタイン）。熱意はあらゆる美の源である。熱意なくして魅力的な美というものはこの世に存在しない（クリスチャン・ディオール）。チャンスは殆どの人々に気付かれない。それは作業着でまとわれ、労力を要するように見えるから（トマス・エジソン）。

清水　光（情報工学科）

10年後にもう一度読むために、今、読む本。

『ワーク・シフト―孤独と貧困から自由になる働き方の未来図〈2025〉』

リンダ・グラットン著，池村千秋訳（プレジデント社）

この本では21世紀初頭の社会でおきている現象（ネットワークの発展に伴うグローバル化、テクノロジーの急激な進化、エネルギー問題の深刻化など）が私たちの働く環境にどのように影響していくかということについて幾つかの未来図が描かれています。

予想する未来図は2025年に世界各地で働く人々の生活で、明るい未来や暗い未来など様々なシナリオが示されています。現代の価値観で取得した各種スキルやその活かし方が将来どのように変わっていくか、その可能性について丁寧に書かれています。ただし、発想が大胆すぎて一般の私達読者にとっては納得できない未来図もあるのではないかと思います。2025年には未来図の妥当性は確認できます。大学に入学した今、この本を読み、その後、数年ごとに、筆者の予想する働き方の未来図を検証してみると面白いのではないでしょうか。

田中 始男（メディア情報文化学科）

20代からの国際派プロフェッショナルへの道

『世界級キャリアのつくり方』

黒川清，石倉洋子著（東洋経済新報社）

本書は、世界を舞台に活躍する、国際派プロフェッショナルの「生き方」に、われわれ自身が大きな関心を呼び起こさざるをえない内容である。

一億総中流といわれてきた日本だが、実質、年収から考えると大勢の人々が中下流社会に属すること、しかも今日、その経済格差がますます広がり社会的問題になっている。日本の将来を背負う若者には、ニートや引きこもりなど社会に適応できないグループと、自分のキャリアデザイン（人生設計）に積極的にチャレンジできるグループの二極化が進み、現状では前者の社会に適応できないグループへの対応策が盛んに議論されている。

このように社会的に弱い人々を大切にする考え方は尊いが、一方で、世界でグローバル化への熾烈な競争が加速化している今日、もっと、若者の志や人生の目標を高めるための教育をも重視し、将来の国際社会において必要となる日本人の役割や、日本と世界との「国際協調」への「絆」の尊さを、現代の日本の若者に積極的に理解してもらい、未来に向かって自己の人生のキャリアを、「世界級キャリア」、換言すれば「グローバルキャリア」として、自ら勇気を持って果敢に構築していくことを、日本の多くの若者に強く意識してほしいと思い、この書を推薦いたします。

中村　博（国際経済学科）

こんなはずじゃなかったと思うときはだれでも来ます
そんな時、特に新入生のみなさんに
是非読んでいただきたい本です

『置かれた場所で咲きなさい』

渡辺和子著（幻冬舎）

著者は30代でノートルダム清心女子大学学長を拝命され、難しい大学運営、学生指導など思いつめる中、ある宣教師にもらった詩から「置かれたところで咲きなさい」という言葉に出会います。置かれた場所に不平不満を持ち、他人の出方で幸せになったり、不幸せになったりしては、自分は環境の奴隷でしかない。そして人間と生まれたからには、どんなところに置かれても、そこで自分の花を咲かせようと決心され、自分を変えて行かれたのです。置かれたところがあなたの居場所です。人生こんなはずじゃなかったと思う時が必ずあります。「咲く」努力でこれからの生き方が全然違ってきます。また境遇を選ぶことはできないが、生き方を選ぶことはできますともおっしゃっています。読んでいるうちに不平不満を言ってる時ではないという気持ちになり、勇気と元気が沸いてくる本です。いかに不遇の時期を過ごすか、幸せな人生を送るコツを教えてくれます。

平松 智子（生命栄養科学科）

あなたの魂を揺さぶります！

『夜と霧ードイツ強制収容所の体験記録ー』
ヴィクトール・E.フランクル著（みすず書房）

私が大学生の頃に読んだ愛読書です。現在も多くの人に読み継がれている、大変なロングセラーです（2002年刊の新版の訳本もあり）。

著者のヴィクトール E. フランクル（1895-1982）は精神科医で心理療法家です。S. フロイドの精神分析に飽き足らず、実存分析を提唱しました。その分析名が示すように、実存哲学の影響を強く受けています。あなたは、自分が生きていることにどんな意味があるのかと、思い悩んだことはありませんか。自分がすっかりいやになって落ち込んでしまったことはありませんか。意地悪をされて人間不信に陥ったことはありませんか。

著者はユダヤ人であったために、第二次大戦中はドイツの強制収容所に入れられ、文字通り九死に一生を得て、終戦を迎えました。両親も妻もみんな死んでしまっていました。それでも彼は、人間信頼を貫き、人間の意志を尊び、希望を失っていません。

人は苦難に遭うほどに、強く、優しく、誠実になり得るのだということを、あなたも魂で感じることが出来るでしょう。

松田 文子（学長）

今を楽しく生きることも大切。
未来を考えて今を生きるのも大切。

『二十歳までに考えておきたい12のこと
—現代人の暮らしといのち』

近藤卓 編著，米田朝香，弓田千春 著（大修館書店）

私たちの感じる“幸せ”は、個々の概念によって違ってはきますが、まずは自分らしく生きることではないでしょうか。

成人を迎える二十歳は、人生において一つの分岐点であると思います。これからの生き方について少なからず考えるときですよね。

この本はその分岐点を迎えるまでに、私たちにとって大切な「暮らしといのち」を支えるために必要な知識と考え方が、様々な視点から網羅された一冊です。

今は必要なくても、知識としてもっていれば、いつかそのひきだしをあける時がくると思います。それを上手に活用し、みなさんの人生がよりよいものとなりますように。

横山 恵理（職員）

笑い話が70% 大切な何か30%。
多才で多彩な大泉洋の大学時代から今。ちょっと未来？

『大泉エッセイ 僕が綴った16年』
大泉洋著（メディアファクトリー）

まず、この本を読む時にやってみてもらいたい事が、2つあります。1つは目次から読みたいと思った所から読むこと。2つ目にパッと広げてそこから読む。このパターンで読むと、時に涙が止まらない話に出会うことがあるので、念のためハンカチの用意を。

紹介文を書きながらこの本を時に読み返しているのですが、なかなか紹介文が進まない！という力がこの本にはあります。

私が本の内容で好きな話を紹介させてください。「肩書き」と「大泉洋という奴は、」です。ローカルタレントとして、俳優として、父親として、一家の主として、息子として。多くの大泉洋がこの2話に綴られています。特に「大泉洋という奴は、」では、多くの人へ向けた感謝の気持ちが少し不器用に書かれています。

笑ってしまう話が多い本ですが、書き下ろしは大切な事を話してくれる、多才な多彩な大泉洋の16年が詰まった一冊です。

渡辺 未来（人間文化学科 平成24年3月卒業）

新入生は、「レポート」を書くよう求められます。
４年生になると論文を書くよう求められます。ご一読を!

『論文・レポートの基本
—この１冊できちんと書ける！』
石黒圭 著（日本実業出版社）

レポートとは何か。論文とは何か。小論文とは何か。なかなか理解するのが大変です。関連する本を何度読んでも、人に何度聞いても、理解できたような、理解できないような、大変わかりにくく、奥が深い、反面楽しみでもあります。

この本では、論文の構成について、第１部で、六つの基本構成として紹介し、懇切に説明しています。①問う 目的 ②調べる 先行研究 ③選ぶ 資料と方法 ④確める 結果と分析 ⑤裏づける 考察 ⑥まとめる 結論 レポートの構成は、出題者から与えられた問いに応じて、①～⑥のいずれかを取捨選択して、六つのうちからいくつかを選ぶことになります。論文の表現について、第２部で書いてあり、正確な言葉選び、正確な表現、論文専用の表現、論文の文体、明晰な文、明晰な文章展開、書き手の責任を詳しく説明しています。

泉　潤慈（税務会計学科）

いまさら人に聞けないことも教えてくれる読んで楽しい一冊です

『調理以前の料理の常識』
渡邊香春子著（講談社）

お米ってどのくらい研げばいいんだろうって思ったことありませんか。

ゆで卵って何分ゆでるんだっけ…。サンドイッチさえ美味しく作れず落ち込んでも人には聞きづらい。そんな聞くに聞けない「調理以前の料理の常識」をこの本が優しく楽しく教えてくれます。

この本には、どうしてそうやって調理するのかという調理の土台になることが書かれていて、謎が解けるような感覚で読むことができます。そして、わかっていく、知る楽しさを味わうことができます。

「基本を覚えることはいろいろな料理を覚えるより、実はいちばん合理的な、料理上手への近道」と著者も言っています。

料理が得意な人も、そうでない人も、きっと読んで楽しくなる一冊です。

大谷 恭子（職員）

ガンダムのスペースコロニーを作りたくて理系へ進んだお姉さんのこと知りたくないですか？

『理系なお姉さんは苦手ですか？
—理系な女性10人の理系人生カタログ』
内田麻理香著（技術評論社）

この本は、ガンダムのスペースコロニーに魅せられて理系に進んだ著者と素晴らしき理系な10人の女性との対談をまとめた本です。

世の中の文系からみた理系女性のイメージは、「白衣・黒髪・めがね」とルックスをイメージし、理系からみたイメージは、「理屈っぽい・数字につよい・パソコンが友だち」とキャラクター面をイメージするそうです。

もっとゆる～く気軽にとらえるのにピッタリな1冊です。

まわりにいる先輩や同級生、他学科の理系女性、先生たち、少数派の理系学科の女性にエールを送ってくれています。理系の女性は「そうそう」を連発し、興味津々でこの本に目を止めた人は「理系女子の魅力」を存分に感じられることでしょう。

片桐 重和（情報工学科）

わしゃあ“広島人”じゃけえ

『広島学』
岩中祥史 著（新潮文庫）

広島出身の歌手「Perfume」が、いつも方言丸出しでテレビ番組で喋っているのをよく見受けます。それをみて、他県の人は「方言で喋って恥ずかしくないの?」と思う人もいるでしょう。その考えを一掃する理由がこの本には詰まっています。

広島は過去、軍都として栄えていました。故に海外の情報を取り入れることに長けており、技術を加工する多くの企業ができました。また、生活面でもハイカラな“日本初”の物を数多く発明した地でもあります。現在では、広島は世界における日本の平均値(縮図)とされています。そのため最近では「MOSDO」に代表されるように、海外の企業は日本における足掛かりの場として出店し、“日本初“のものが沢山お目見えしています。こういった広島の地理、歴史、環境を踏まえ、広島人を裸にした一冊です。

“もっと簡単に知りたい”という人は、「広島ルール」も所蔵しています。この詳しい版が、この本「広島学」です。

桑田 成年（職員）

イメージや思い込みで物事を判断していませんか？
—根拠に基づいて、
正しく判断する考え方を学びましょう—

『京大医学部の最先端授業！
「合理的思考」の教科書』
中山健夫 著（すばる舎）

タイトルを見るとなにやらおどろおどろしく即座に拒絶！となるかも知れませんが、まあ読んでみて下さい。著者が専門とする疫学分野の事例を用いて「物事に対する正しい判断の仕方」が易しく面白く書かれています。病気になる原因、薬の効き目、副作用の危険性など、皆さんも感心のある身近な事例を取り上げ、「根拠に基づいて正しく判断する考え方（批判的思考：クリティカル・シンキング）」が、かみ砕いて説明されていますので、文化系の方も気軽に興味深く読み進められるでしょう。

現代は具体的な数字で示され「一見真実である」情報が溢れています。それらを鵜呑みにせず、「本当に正しい情報の見分け方、決断の仕方」をしっかりと身に付けたいものです。

ちなみに、この本は、京大医学部の授業で使っている教科書ではありません。

塩見 浩人（薬学部）

日本語ってこんなふうになってたの!?
笑って学べるコミックエッセイ!!

『日本人の知らない日本語』
蛇蔵，海野凪子著（メディアファクトリー）

日本語学校で、先生と外国人学生の日常を舞台に繰り広げられる語学コミックエッセイ。

外国人ならではの日本語の使い方や疑問の数々、難問珍問は、私たち日本人も知らなかった日本語の一面を教えてくれます。ただ、素朴なだけに難解です。

●外国人ならではの意外な日本語の使い方に、目からウロコの面白さあり

●日本人だからこそ知らなかった日本語の文法や法則性に“へー”となる

●日本大好きな在日外国人を見て、ちょっとうれしい気持ちになれる

異文化交流気分を味わいながら、日本人だけど知らなかった日本語の秘密を知ることが出来る楽しくて“タメ”になる本です。

日本語の面白さに触れながら、大爆笑の日本語バトルで、日本語を再発見できる１冊です。

（このシリーズは、第４巻まであります。）

下村 則恵（職員）

日本と中国は競合関係ではなく、補完関係です。

『共存共栄の日中経済
—「補完論」による実現への戦略』
関志雄著（東洋経済新報社）

改革開放以来、中国は、大胆な経済改革と高い経済成長率をもつことで、世界各国の企業に押し寄せられます。その後2010年に、中国はGDP全体額で世界第二位の経済大国になり、世界を驚かせました。経済発展に伴い、世界の政治舞台で中国の発言力も増していくようになります。これに対し、日本を含め、アジア諸国に中国脅威論が広がりつつあります。ところが、著者の研究により、日本はうまく両国間の補完関係を生かせば、中国の台頭は日本経済再生の機会になると考えられます。とりわけ、日中のお互いの優位性を利用する基盤を築くことは、日本の空洞化問題対応策として、無視できません。本書は、このような結論を引き出すために、中国の経済実力、ビジネス環境及び不安定化要素を明らかにした上で、日中両国の経済が補完関係にあることを確認し、それを生かすための方策を提示しました。著者は、日中経済関係を巡り、冷静的にやさしい言葉で論理に基づいて議論しますから、是非最後まで読んでいただきたいです。

鐘　一君（経済学科4年）

グループディスカッションの方法が分かる。だけじゃない

『ザ・ファシリテーター
—人を伸ばし、組織を変える』
森時彦著（ダイヤモンド社）

大学では、複数人での話し合い、グループディスカッションやグループワークを行う機会が増えていきます。今までも様々なことを話し合ってきたと思いますが、ここで一度“話し合いの方法”を考えてみませんか?

これは、企業において課題解決にファシリテーションを用いると、どう効率的に進んでいくのかを著した小説形式のビジネス本です。ファシリテーションとは英語で“便利化”という意味ですが、「お互いを刺激し合い、よりよい解決方法を導くもの」としています。ファシリテーションを用いれば組織も変えることができる、というストーリーですが、社会人になる前、授業でのグループディスカッションや友達との話し合い、さらには自分自身の考えをまとめる方法にも使うことができます。一人で考える際にも参考資料という本や今まで見聞きした意見を元にした“話し合い”があるからです。小説形式で読みやすくなっていますので、ぜひ読んでみてください。

中﨑 千尋（生命栄養科学科）

「全体は非真理である」
—偽りにみちた社会にだまされないために
個我の力を鍛えよう—

『ミニマ・モラリア—傷ついた生活裡の省察』
テーオドル・W.アドルノ 著（法政大学出版局）

社会全体が偽りに満ちあふれているなかで、いかに社会に同調することなく、だまされず正しく生きていけるのか。この至難の問いに20世紀ドイツの社会哲学者アドルノは、ナチズムの暴力が猛威をふるうドイツを去り、アメリカに亡命していたさなかにアフォリズムという形で答えています。そこでは全体社会への批判的視点などかけらもない月並みな処世訓とは違って、社会の眼に見えない諸力によって個我の領域がどれほど疎外され弱体化されているかが、日常生活から卑近な例を引いて犀利な筆致で暴きだされています。「絆」などといった甘い言葉にもだまされてはいけません。所詮それは同調への圧力へと変わり、最小限（ミニマム）の抵抗の拠点である個我の力を弱めるにすぎないからです。連帯すべきはただ人類の苦悩ということになるのです。アドルノの思想に近づく最良の入門書であり、読みやすく名調子といってよいテンポある訳文で読めるのも本書の魅力です。

原　千史（人間文化学科）

今更、あえて古典的受験参考書を!
学生たちと教員とで創りたい大学での教育へのヒント

『古文の読解』

小西甚一著（ちくま学芸文庫）

入学したての大学生に、大学受験の参考書?まあ、そう言わないで。古文を読むことを奨めているわけでなく、大学に何を期待して、どのような授業を求めるのか、考えるヒントになる本としてすすめたいのです。

書店で手にとってみましょう。受験参考書の棚にはこの本はありません。文庫本の棚で探してください。ページを覗くと、会話口調の解説に少し驚くはず。読み続けると、小西先生の噛んで含める語り口に引き込まれること、請け合います。授業がこんなにも懇切丁寧で、温かいやり取りであれば、どんなにすばらしいキャンパスライフが送れるだろうか、と感動した人は、迷わず購入。思わなかった人は、スッパリと本を元の棚にもどしましょう。

実は、新入生だけでなく新入生を教える先生たちにこの本をすすめたいと思うのです。

期せずして古文の読解力がついてしまったら、いつ来るかもしれない震災に備えて「方丈記」を読もう!

南　卓志（海洋生物科学科）

ねたみとそねみが歴史を変える

『嫉妬の世界史』
山内昌之 著（新潮新書）

他人をうらやむ感情を嫉妬（しっと）と呼びます。ただし、この嫉妬という感情には、「ジェラシー型嫉妬」と「エンビー型嫉妬」の二種類があるようです。ジェラシー型嫉妬とは目標とする相手やライバルに対して、「自分の実力を伸ばす」ことで勝ち抜こうとするポジティブな嫉妬のことです。一方のエンビー型嫉妬は、相手の足を引張ったり悪口を言うことで「相対的に自らの立場を上にしよう」とするネガティブな行動です。著者の山内昌之氏は、歴史を彩る偉人たちも実はこのような感情に翻弄されながら生きていたことを述べています。ヒトラーとロンメル、徳川慶喜と勝海舟、そして森鴎外の葛藤など歴史上の人物たちの複雑な心の動きが語られています。「人間通」の作者・谷沢永一氏は「人間性の究極の本質は嫉妬である。人の世を動かしている根元は嫉妬である。」とさえ述べています。「嫉妬の世界史」はそんな嫉妬のメカニズムを学べるお勧めの一冊です。

金尾 義治（薬学部）

涙を流さずにはいられない、
そして幸せというものについて
熟考してしまう・・・名作です。

『アルジャーノンに花束を』
ダニエル・キイス著（早川書房）

原作は50年ぐらい前に発表されていて、日本語訳も素晴らしい逸品です。舞台化や映画化された作品が多数あるので、何処かで接しているかもしれません。

知的障害治療の臨床試験で、被験者として脳手術をうけるのが本編の主人公、陽気な知的障害者のチャーリーです。この手術の前後の様子が、主にチャーリーの視点で進行します。この手法が秀逸で、教訓めいたところは一切なく、チャーリーの喜怒哀楽が淡々と述べられているため、我々読者も自然に感情移入してしまいます。そしてもう一人(?)の主人公が実験動物のハツカネズミ、アルジャーノンです。ある意味先輩で喋らないアルジャーノンとチャーリーとの交流が、作中に複数あるターニングポイントで重要な役割を演じます。本編の最後の一節、「アルジャーノンに花束を・・・」に至ったとき、君たちの善悪の感受性に関する新しい心の扉が開かれていることでしょう。

小嶋 英二朗（薬学部）

人間は本能の壊れた動物である。
答が一つのクイズ＝受験勉強から、
自分で考え、独自に解釈する学問へ

『ものぐさ精神分析』
岸田秀著（中公文庫）

21世紀の現在、福島原発事故や秘密保護法強行採決が明らかにするのは、専門家や権威を妄信することの危険性です。日本だけでなく世界中で効率＝金もうけ中心主義＝新自由主義のグローバリゼーションというわかりやすい「悪」が猛威を振るっています。そんな時代に大学で学ぶ意義はどこにあるでしょうか。悪に加担することではないはずです。世の中で当たり前に常識だと考えられている事は本当に正しいのか。あらゆる事を自分で考え、独自に解釈し、自らの進むべき道を選び取る事。自己という物語の作者として人生という傑作を創造し続けていくこと。人間文化学科の使命は現代における人間の幸福を明らかにすることです。本能が壊れた故、言語による文化という物語（フィクション＝神話、宗教、芸術、自然科学等）なしには生きていくことのできない人間。そんな人間の文化を研究していくための第一歩として是非読んでみて下さい。

重迫 隆司（人間文化学科）

対話が癒しになる見事な見本

『村上春樹、河合隼雄に会いにいく』

河合隼雄，村上春樹著（新潮文庫）

日本のユング派心理学の第一人者であり、文化庁長官もつとめた河合隼雄と、最近は毎年ノーベル文学賞候補のうわさが立つほど、日本の代表的な作家である村上春樹が、それぞれのプロの道での体験を踏まえて、いろんなトピックを話題にしながら、肩のこらない雑談のような気楽さで、しかし、活字ではあまりみかけない各自の考えを相手にぶつけていく。例えば、「われわれは苦しむために結婚するんだ」という河合の定義は、意表をついて、村上に思考を迫るものとなっている。彼にとって河合は、おそらく自我理想ともいうべき、父親的な存在で、本書は、相手に対する尊敬の念がにじみ出ていて、実に心なごむ対話となっている。トピックも、「阪神大震災」とか「オウム真理教事件」などの歴史的な出来事も扱われており、ついつい対話に釣り込まれ、二人の深い思索にふれることができる。文学が持つ癒しの力に気づく、楽しい道しるべにもなってくれる本です。

田中 久男（人間文化学科）

涙と関わりのない人生は、
とても薄っぺらなものなのかもしれません

『涙の理由』
重松清，茂木健一郎著（宝島社）

学生相談室は好きなだけ泣くことが許される、学内で唯一の場です。私はそこでさまざまな涙に立ち会います。

本書では小説家と脳科学者が「人はなぜ涙を流すのか」という問いを2年間かけて考え抜きます。「泣ける本」と「泣きながら読んだ本」の違い、涙のメカニズムが科学的に研究困難な理由など…そして彼らは「安易な借り物の涙」ではなく「自分だけの涙」にこそ意味があること、「良い涙」はさらに先の別の場所へ「開かれている」という結論を得ます。

相談室で涙するとき、学生たちは目の前の問題をこえて「こんなに苦しくて、それでも生きていく理由は何か?」と問い続けているように見えます。「安易な借り物の」答えでは足りません。私とひたすら考えるうち、彼/彼女らは漠然と、しかし手応えのある「自分だけの」答えを見つけます。それは苦境からの出口が「開かれ」る兆しでもあるのです。

藤居 尚子
（保健管理センター学生相談室／心理学科）

「こころ」を見つめ直す・・・
ユング心理学者が導く
「借りぐらしのアリエッティ」原著の深層

『ファンタジーを読む』
河合隼雄 著（講談社+α文庫）

ツイッターやLINEで友人知人とリアルタイムな文字のやり取りが可能になった現代こそ、相手を思いやる気持ち、想像力、「ファンタジー」が必要とされる時代ではないでしょうか。この本は世界珠玉の本格的ファンタジー文学を取り上げ、その背後に潜む人間の「こころ」の問題に深い考察を巡らせたものです。取り上げられる13作品は児童文学ですが、単なる「子供向けの本」とあなどってはなりません。今や世界を代表する映画監督となった宮崎駿の「借りぐらしのアリエッティ」の原著（メアリー・ノートン作『床下の小人たち』）も入っています。文学作品を分析する主題は、生・老・病・死、「もの」と「こころ」、夢、自己、家族、旅・・・等々、大人にとって、また生徒から学生そして社会人への変化のただ中にある大学生の皆さんにとって、とても身近で深いテーマです。本書、そして紹介される文学作品を読んで、「こころ」を見つめ直してみませんか？

水上　優（建築学科）

相手の心を開く鍵はあなたが握っている

『聞く力—心をひらく35のヒント』
阿川佐和子著（文春新書）

多くの人は、会話をする上で難しいことは伝えることだと思うでしょう。しかし、本当に難しいのは伝えることよりも聞くことなのかもしれません。

本書は著者の貴重な体験をもとに、聞くことの難しさを伝えると同時に、話し手がもっと話したくなるような聞き手の姿勢について教えてくれます。相づちをうつこと、好奇心を持って話を聞くこと、相手のテンポを大切にすること。これらはどれも話を聞く上での基本中の基本ですが、では実際にあなたはこれらのことができているでしょうか?

会話をする上で鍵を握るのは、話し手ではなく聞き手なのです。本書を読み「聞く力」を身につければ、あなたも“あなたと話すとつい喋りすぎちゃう”と言われるに違いありません。

本書は、将来、患者とのコミュニケーションを必要とする薬学部の新入生だけではなく、多くの新入生に読んでいただきたい一冊です。これからはじまる大学生活できっと役に立つと思います。

渡邉 有紀子（薬学部5年）

サリドマイドという薬がたどった数奇な運命

『神と悪魔の薬サリドマイド』
トレント・ステファン、ロック・ブリンナー著
本間徳子訳（日経BP社）

みなさんはサリドマイドという薬をご存知でしょうか。西ドイツのグリュネンタール社が1957年に睡眠薬としてつくった薬です。その後、日本でもアミノ酸を原料としてつくった安全な薬という宣伝文句とともにサリドマイドは発売されました。しかし、それをのんだ妊婦から次々と奇形の子供が産まれました。そのためサリドマイドは悪魔の薬と呼ばれるようになり、人類の歴史から永遠に葬り去りたいものとなっていきます。しかし、その後の研究でサリドマイドはハンセン氏病、各種ガン、エイズなどに効果のあることがわかってきました。そしてそれまでほとんど治療薬がなかった多発性骨髄腫の薬として承認されています。本書はこのようなサリドマイドがたどった数奇な運命を、薬害被害者やそれに携わった医師、科学者の生々しい証言を踏まえて紹介した書です。これから医療人を目指す薬学部の新入生のみならず、多くの新入生に読んでいただきたい一冊です。

石津　隆（薬学部）

タフで、楽しくて、そして泣ける科学者人生の話

『小さな小さなクローディン発見物語
—若い研究者へ遺すメッセージ』
月田承一郎著（羊土社）

科学者の人生とは、こんなにタフで、こんなに楽しくて、そして科学者月田承一郎の気持ちはなんともこんなにせつないのか、と読んで胸にせまるものがあります。細胞と細胞の接着部には接着装置があり多くのタンパク質が構造と機能を保持するために働いています。科学者の「視力」をもってそれらのタンパク質を形態学的、分子生物学的手法で解析していく、その過程を臨場感あふれる文章でつづられています。なぜこんなに強くせまってくるのか。月田先生は、膵臓癌であることがわかってから52 歳という若さで亡くなられる前に、この本を書かれたということです。巻末には謝辞とともに先生の研究に対する無念が記されています。また全文を通じて限られた時間のなかで自らの研究を次世代の研究者に遺したいという強い思いを感じます。本から溢出でている目にはみえないこれらの強い思いにひかれ、私は、書店で思わずこの本を手にとっていたのかもしれません。

井上 敦子（薬学部）

毛のないけもの＝人間、という動物のおはなし

『人間はどういう動物か』
日高敏隆著（ちくま学芸文庫）

あなたは、人間をどんな動物だと考えますか。二本足で立って、言葉を使う、他の動物とは違う特別な存在。こんな感じでしょうか。

この様に思いたがっている動物こそが、人間のようですが、人間もただの動物の一種です。象が長い鼻を持つように、人間は直立二足歩行という特徴をもつ動物にすぎないようです。この本によると、流行の服を着るのも、不倫をするのも、動物たちと同じことを人間もやっているにすぎないのだそうです。

いや、それでも人間は特別な存在なのだ、と思いたい人もいるでしょう。そう思う人こそ、一度この本を読んでみて欲しいと思います。そして、こういう物事の見方もあるんだ、ということを知って欲しいです。特別な動物である人間ならば、きっと何か感じることがあるでしょう。

読書という、人間にしかできないことを通して、一度人間とはどういう動物か考え直してみませんか。

川上　さおり（職員）

科学は面白くなくてはならない!
破天荒なノーベル賞物理学者、
リチャード・ファインマンの自伝。

『ご冗談でしょう、ファインマンさん 1』

リチャード・P.ファインマン著，大貫昌子訳（岩波書店）

科学者の書いたとはいっても、難しい数式だとか、理系の講義は一切でてこない。少年時代に近所のガラクタを拾ってきてつくった「実験室」の話、大学のつまらない授業をいかにやりすごすかの話、プリンストンの原爆開発施設で金庫破りの方法を学んだ話など、ユーモアあふれる語り口のエッセイだ。

彼の原動力となっているのは、なんでも見てみよう、とにかくやってみよう、面白いことをしてみようという精神だということがよくわかる。「先生が言っているから」という権威主義や「教科書に載っているから」という丸暗記を徹底的に批判する。科学は面白いものでなくてはならない、科学者は人を楽しませなくてはならないからだ。理系の人も、文系の人も、科学が好きな人も、そうでない人も一読の価値ある一冊である。

伍賀正典（スマートシステム学科）

現役獣医師が多様化するペット医療の知られざる現場を描く

『珍獣の医学』
田向健一 著（扶桑社）

私たちの周りでペットとして飼われている動物は、犬や猫だけではありません。ウサギ・カメを始めとして様々な種類に及びます。

犬・猫を中心に診療している動物病院が多いなか、哺乳類から爬虫類、無脊椎動物まで、ほとんどすべてのペットの診療を行っている獣医師の苦悩、試行錯誤そして、びっくりするような治療法をコミカルに真摯に伝えてくれます。

動物たちはペットなのか、家族なのか。

動物を飼うというのはどういうことなのか。獣医は医療か、ビジネスか。

命についても考えさせられる一冊です。

表紙は水温計を飲み込んでしまったパジェットガエルのレントゲン写真です。

高橋 佳美（職員）

宇宙の不思議に迫ってみよう
それはあなたの人生を豊かにする

『重力とは何か—アインシュタインから超弦理論へ、宇宙の謎に迫る』

大栗博司 著（幻冬舎新書）

筆者は物理学者であり物理学の立場から重力という身近な自然現象の仕組みの解明を通して宇宙の謎に取り組んでいる。19 世紀末から発達した量子論とアインシュタインの相対性理論に起源を発した現代物理学は 20 世紀後半から 21 世紀初頭にかけて大きく発展した、物質の究極の単位が原子よりも小さいクオークと電子や光子そしてニュートリノでできていることを発見した。最近見つかった物質に質量を与えるというヒッグス粒子もそういう現代物理学の成果である。その中で一風変わった理論が超弦理論である。超弦理論では宇宙の物質や力は極小の弦（ストリング）が 10 次元で振動することにより織りなされていると説明している。詳細は本書に譲るが、内容は最近の研究成果を取り込んでおり新鮮である。古くなる前に読んでおくべき本だろう。

本書では難しい概念の説明も懇切丁寧であり手抜きがない。物理学は苦手だったという人は読んでみるといいのではないか。

田中　聡（スマートシステム学科）

ある道具をうまく使えなかったら
それはあなたのせいではなくて
道具のデザインが悪いせいである

『誰のためのデザイン？』

D.A.ノーマン 著，野島久雄 訳（新曜社）

はじめて入った部屋で電気をつけようと思ったとき、どのスイッチを点けたらどの電気が点くかすぐにわかりますか?

たまに思ったところと違う電気が点いたりしませんか?

それはあなたのせいではなくてスイッチの配置のデザインが悪いせいかもしれません。そんなことがもし車や飛行機といった乗り物で起きたら重大な事故につながってしまいます。

人間にとって使いやすく、安全で、しかも人間がおかしやすいエラーを未然に防止してくれるようなデザインとはどういうものでしょう?

(1)ユーザが何をしたらよいかわかるようにしておくこと

(2)何が起きているのかをユーザにわかるようにしておくこと

この 2 つを確実に守ればそれは実現可能と言われています。

あなたの周りの今まで気づかなかった問題を見つけるヒントを与えてくれる本だと思います。

中道　上（情報工学科）

こころの座と言われる脳の魅力に引き込まれます！

『進化しすぎた脳
—中高生と語る「大脳生理学」の最前線』
池谷裕二著（朝日出版社）

心理学を専門とする私にとって、脳は魅力的な研究対象ですが、なかなか手強い相手でもあります。実際、基礎科学の中で最も解明が進んでいない分野として、宇宙とともに脳がよく引き合いに出されます。でも、見上げることしかできない遠い存在の宇宙に対して、脳は私たちの身体の一部であるため、誰もが身近な疑問を多く持ち、それについて思いを巡らせることができます。たとえば、「目で見たものをどうやって見たと感じるのか?」「感情はどのように生じるのか?」といった疑問です。そして、これらは日常的に行っているのに、説明できないことに誰もが驚きを感じます。

高校生との対話形式で展開される『進化しすぎた脳』は、最新の脳機能研究もやさしく紹介しながら、このような脳に関する多くの疑問に答えてくれます。記憶の座と言われる「海馬」の研究で有名な著者が誘う脳の魅力的すぎる世界に、新入生のみなさんもきっと引き込まれることでしょう。

平　伸二（心理学科）

近年のゲノム科学の急激な発展により、
ヒトのＹ染色体がアフリカを出てから変質しながら
全世界に広がる軌跡を追うことができるようになった

『Ｙ染色体からみた日本人』

中堀豊著（岩波書店）

Ｙ染色体は男系遺伝で男から男に伝わり、ミトコンドリアは女系遺伝で女から女に伝わる。そのため、人類が出アフリカを果たした時の小集団の均一なＹ染色体がアダムで均一なミトコンドリアがイブに喩えられる。出アフリカ後のヒトの諸系統の発生と拡散を追跡し人種・民族の興亡を明らかにするには、ミトコンドリアの多型解析より発生頻度の高いＹ染色体の多型解析の方が適切と考えられ、国際的にＹ染色体の多型解析が進められている。本書は人類遺伝学で最も注目を浴びている、このＹ染色体多型解析を分かり易く紹介し、その解析結果をとくに日本人を対象に議論したものである。現在日本にいる男性は大陸での過酷な生存競争に敗北し、日本という海に隔てられた国土に避難してきた人達である。日本では共存・共栄の気風のもとで、縄文、弥生、古墳時代に渡来した人たちのＹ染色体がお互い競合することなく複合的な多型を維持していることを力説している。

藤田 泰太郎（生物工学科）

現代医学の目からみた徳川将軍家十五代。
残された記録文書から歴代将軍の
健康状態や死因を読み取る。

『徳川将軍家十五代のカルテ』

篠田達明著（新潮新書）

江戸幕府の歴代の将軍たちについては様々な記録が残されています。例えば、岡崎市の大樹寺に安置されている歴代将軍の位牌はそれぞれの遺体の身長を表していることが知られています。ドラマなどでは堂々とした体格の俳優が将軍を演じていたりしますが、位牌の高さから推察される将軍たちの身長は 160 cm 以下で、現代の男子の平均身長よりずっと低いのです。また、将軍たちの健康状態についても様々な文書に記録が残されています。本書では、お医者さんである著者が現代医学の目でそれらの記録を分析して、将軍たちの健康状態や死因、持病に伴って現れる行動・言動などについて推察することが内容の中心になっています。この視点が一般的な歴史小説などと全く違っていて、とても新鮮に感じられます。ドラマ等を通じてあなたが想像している将軍たちの姿と、記録を科学的な視点から分析することから生み出された本書での彼らの姿を比べてみてはいかがですか？

満谷　淳（海洋生物科学科）

生命である人間が
「生命とは何か?」という問題を解けるか?
吟遊科学者と高校生の対話。

『世界をやりなおしても生命は生まれるか？』
長沼 毅 著（朝日出版社）

砂漠や深海、極地などの厳しい環境にも生息できる生物を探求して「生命とは何か」に迫ろうとしている広島大学の研究者が、福山市内の高校生と 4 日間にわたって話し合ったセッションです。話題は、「地下 1000 メートルの研究室」、「アゴはもともとエラだった」、「タケコプター生物」、「キリンの首は、ただ、伸びた」、「パソコン上で動く人工生命」、「人工ケミカル生命」、「生命を動かすオペレーションシステム」、「生命の存在は宇宙の死を早めるか」、「おにぎり一個分のエネルギーで人は死ぬ」など、生命を巡る素朴な疑問に関して縦横無尽に話し合いながら、生命についての常識の殻を打ち破る可能性を探った夢のある本です。「自分って何?」と問いながら生き続けているヒトという存在である自分って何?生命に関する万華鏡のような世界がこの本には広がっています。

山口 泰典（生物工学科）

建築構造設計の実務者らが書いた事典で、
日頃の経験から得た知識をもとに、
平易な言葉で説明されています。

『建築構造用語事典』

日本建築構造技術者協会関西支部
建築構造用語事典編集委員会 編著（建築技術）

この本は、建築構造の用語について説明された事典ですが、一般の建築構造に関する事典とは大きく異なります。それは、①構造設計に携わる実務者らが執筆しており、言葉の意味に現実味を強く感じることができます。②専門的な知識に加え、日頃の実務経験、建築主や建築家とのやり取りを通して得た知識が、図や数式ではなく平易な言葉で説明されており、実務の世界を垣間見ることができます。③ひとつの用語について3名が解説しており、技術用語を多方面から理解することができます。

建築を目指す学生諸君には、座学や演習からでは得ることのできない、実務の深さを感じることができると思います。また、建築以外の学生にとっても、「耐震」や「安全」は現代社会における重要なキーワードです。本のサイズはA5ですから、鞄に入れての持ち運びにも便利です。読み物感覚で、気軽に建築構造について学んでみてはいかがでしょうか。

山田　明（建築学科）

もののけ姫と弁証法

『もののけ姫 完全版 1～5』
宮崎駿脚本・監督（徳間書店）

たたら製鉄と鉄砲製造業を営む“エボシ御前”。エボシを殺そうと襲う“もののけ姫”。エボシは“人間の繁栄のためには動物は滅びてかまわない”という人間中心主義者、もののけは“動物にも生きる権利があり人間もその一員”という動物博愛主義者です。

“既存の思想・制度・社会に対し、それを否定するものが生まれ、両者の闘争の結果新しい状態が誕生するが、再び次の対立が生まれ、その繰り返しを経て理想状態に向かう”という学説がヘーゲルの弁証法です。本書は弁証法の構図にぴったり当てはまります。

著者は、もののけ姫の主張が正しいと言っているのではなく、闘争の結果新しく誕生する状態、第3の登場人物“アシタカ”の思考結果こそが正しいと主張しているのです。

福山市鞆では、架橋推進派（エボシ）と歴史的景観派（もののけ）の対立があります。アシタカ的解決策とはどんなものでしょうか。本書を見て、考えてみてはいかがですか。

井上 矩之（国際経済学科）

読み終わった後に想像が膨らむ一冊!
繰り返し読みたくなる小説です

『白夜行』
東野圭吾 著（集英社）

この本は、雪穂と亮司という二人の登場人物の身の回りで起こる殺人事件についてのミステリー小説です。

二人が直接的な会話を交わす場面がないことや心理描写がないことから本心が最後まで読めないという点が、この小説の面白いところだと思います。

本当のところはぼんやりとした終わり方にはなっていますが、特にもやっとした感情も残りません。

なぜなら読者の想像が膨らむような要素が小説中に散りばめられているからです。

白夜行を読み終わった後は、この本を薦めてくれた先輩と討論をし(笑)、もっと他の意見が聞きたい!と思いインターネットでいろいろと考察を読み漁りました。

その後にもう一度読み直すと、違った見方ができて楽しいです。

みなさんもぜひこのワクワクを体験してみてはいかがですか?

片山 佳織（薬学部５年）

何事にも先達はあらまほしきもの

『松尾芭蕉『おくのほそ道』
—100分 de 名著』

長谷川櫂 著（NHK出版）

昔「奥の細道」の原文を対訳で読みましたが、面白くもなく、俳句への興味もわくことはありませんでした。ここに推薦するのは、最近出たその解説本で、数時間で読み終わってしまいます。しかし、中身は濃くて、俳句の文学史上の位置づけ、旅の目的、旅程と主題の構成、この旅で作句上何を学んだのかなどが解説してあります。

俳句の主題は、関所の間で、禊の旅、歌枕の旅、悠久なる宇宙、人の死と別れの4つに分けられるとします。有名な「荒海や佐渡によこたふ天河」は第3部の一句です。この旅の成果として、自然の風景と自分の心象を17文字であらわす文学としての俳句が完成したとします。例えば、「しずかさや岩にしみいる蝉の声」の「しずかさ」は、悠久なる天地を前にした芭蕉の心象であるとします。原文を読む前に、どういう切り口から読むかを知ることは、大事なことが分かる本です。

古島 義雄（国際経済学科）

「三顧の礼」「水魚の交わり」を学ぶ

『中国 詩心を旅する』
細川護熙著（文藝春秋）

平成25年6月13日に福山大学「大学会館」で開かれた教養講座で「戦国を生き抜いた知恵」をテーマに、細川家の500年にわたる歴史を語った元首相で、江戸期に熊本藩主を務めた肥後細川家の18代当主である細川護熙さんが書いた『中国詩心を旅する』を紹介いたします。

この本は細川さんが48回にわたり中国を訪ね、孔子、老子、三国志、李白、杜甫、白楽天などの、それぞれ生れた故郷や活躍した場面、物語の状況などを紹介する貴重な本です。

新入生の皆さんも中学や高校で耳にしたことのある「三国志」にでてくる蜀の劉備が辞を低うして草蘆に隠棲していた諸葛孔明を訪ね出馬を請う「三顧の礼」や孔明を得た劉備が二人の緊密度を表現した「水魚の交わり」魏を叩いて中原を回復しようとしながら挫折する因を作った愛弟子を涙をふるって処罰した「泣いて馬謖を切る」など、孔明にまつわる言葉や多くの文人、詩人の人生訓など48篇を盛り込んだ本ですので、ぜひ読んで欲しいと思います。

清水 厚實（理事長）

歴史は創られるものなのか

『史記列伝』
司馬遷著（岩波文庫）

史記は司馬遷によって記された「本紀」、「表」、「書」、「世家」、「列伝」からなる紀伝体の史書です。司馬遷は列伝で、正義を貫き、人に屈せず、機を失することなく世に現れた人々を取り上げ、生きざまを描いています。宰相や武将、良い役人や悪い役人、刺客や侠客、セレブなどなど、とにかく色々な人物が登場し、読者をしてこれを飽きさせません。

正史として記録される歴史書は、ひとつの王朝が滅びた後、次代の王朝に仕える人々が記したものです。そのため、現王朝に都合の良い事が採択されやすいという弊害もあります。史実は不変であり、かつ「歴史は繰り返される」といわれるように古今の人々にとって普遍ともいえますが、さぞ歴史書が不偏であることは困難なことでしょう。

このような中にあって、司馬遷は列伝で取り上げた人物像の集合体から、自らの思いを主張し、人としてのあり方の普遍性とは何かを問いかけています。ご一読あれかし。

田中　哲郎（薬学部）

「時間よ止まれ、お前は美しい!」
——人生の価値とは何か?

『ファウスト』
ゲーテ作（岩波文庫 他）

『ファウスト』はゲーテが生涯を費やして完成させた傑作です。ファウストは、あらゆる学問を極めたにもかかわらず「自分は何も分かっていない」と絶望し、悪魔メフィストフェレスと契約を結びます。メフィストは愛、富など人間の欲望実現の手助けをすることを約束し、ファウストが満足して「瞬間に向かい、止まれ、お前は美しい!」と言ったら彼の魂を奪うという契約です。無垢な少女との悲劇的な恋等様々な体験をしたファウストは、富と権力を得て干拓事業に乗り出します。そして、「自由な大地の上に自由な民とともに立つこと」を予感した時、「時間よとまれ、お前は美しい」と言って息絶えるのです。賭けはメフィストフェレスの勝利に終わったように見えます。しかし、ファウストの魂は救われます。なぜでしょうか?おそらく、20代に読んだ時と50代で読んだ時の答えは異なります。『ファウスト』は、一生のあいだに何度も読み返す価値のある作品です。

冨士 彰夫（国際経済学科）

気軽に楽しむ「徒然草」

『徒然草』
兼好著，島内裕子校訂訳（ちくま学芸文庫）

「徒然なるままに・・・」、誰もが一度は目にし、一度は必ず読んだ、いや、覚えさせられた有名な古典です。古典を学習する時期、含蓄ある随筆の意図を理解しようにも余裕などなかった記憶があります。そして、古典は日本語に似た外国語であると評する向きもあるくらい原文は難解でした。

そこで、原文を外国語として割り切って、訳が付いたものを読んでみると結構おもしろいものです。かつて学んだ有名な「段」をみると、難解な文章も、受験から離れ、余裕をもって読み直すことで味わい深く感じることができます。無論、全段を読むわけではありません。

気が向くままに、有名な「段」を読んでいるとその近くにもおもしろい話があります。そのおもしろさは、滑稽あるいは趣ある情景描写の落ちに「なるほど」とうなずける、現代にも通じる皮肉や教訓や煩悩に対する戒めがあるからでしょう。本書には訳の他、訳者の評があり気軽に古典が楽しめる一冊です。

藤岡　晴人（薬学部）

『砂糖でできた弾丸では子供は世界と戦えない』
直木賞作家が描く死から始まる青春ジュブナイル

『砂糖菓子の弾丸は撃ちぬけない』
桜庭一樹 著（角川文庫）

「自分は人魚で、どんなにか人間が愚かか、生きる価値がないか、みんな死んじゃえばいいか、教えてください。ではよろしくお願いします。ぺこり」

この物語は上記の自己紹介をした人魚姫こと海野藻屑がバラバラ死体で、主人公山田なぎさに発見された事から始まります。

この小説は元々ライトノベルといわれるジャンルの物語なので、かなり読みやすい文体となっており、分量も200ページ程でスラスラと読めます。

ただ内容は「閉塞感溢れる田舎町で起こる劇的ではない殺人劇」です。

著者もあとがきの中で「少年少女向けでも、娯楽小説でさえないかもしれない」と書いている程で面白さを求めて読む本ではないかもしれません。

ただ中学の頃、空想と夢を現実に打ち負かされた人には、きっと大事な“何か”が心の中に残る小説です。

藤原 直希（海洋生物科学科１年）

「戦争の時代」を鮮やかに伝えてくれる一冊、
愛と笑いと勇気の物語。

『少年 H』

妹尾河童 著（講談社文庫）

「日独伊三国同盟」、「軍事機密」、「隣組」、「防毒マスク」、「実弾射撃」、「疎開」、「空襲」、「学校工場」、「一人一殺」、「進駐軍通達」、「戦災者住宅」等々、聞いたことがあります?

「胸に『H. SENO』の文字を編み込んだセーター」、「外国人の多い神戸の街」、「洋服屋の父親、クリスチャンの母親に育てられた、好奇心と正義感が人一倍旺盛な『少年 H』」がみた戦争中の日本社会。

「この戦争はなんなんや?--忘れられかけている太平洋戦争とその時代を、純粋な『少年H』の眼を通して現代に記した、自伝的長編小説。戦争のまっただ中を逞しく生きる悪童とその家族が感動を巻き起こす大ベストセラー作品。戦争を知らない少年少女はもちろん、大人たちもぜひ読み継いでほしい名作」（本書の表紙から引用）。

全漢字に振り仮名が付いているので、外国人留学生にとっても読みやすい。

馬　成三（国際経済学科）

『悪の教典』作者が描く、いびつなニホン。
人間の姿をした“何か”と、
動物の姿をした“何か”の物語（アニメ作品も）

『新世界より 上』

貴志祐介 著（講談社文庫）

昨今ライトノベルと呼ばれる、キャラクターの個性に重点を置いているジャンルを好む学生が多いと思う。本に触れるということはとても良いことだ。しかし、ライトノベルはキャラクターに対し愛着はわくが、文章に満足することはとても少ない。この作品は、「そろそろライトノベルは卒業したいな」と考える学生にとってとても良い本である。物語の形としては、一つの出来事をきっかけとして事態が急転するというものであり、新入生の皆さんが日頃親しんできたであろう作品とも似たもので、主人公陣営の使う超能力などは我々が子供の時分憧れていたものである。

今回すすめさせていただくこの本は、上・中・下と分けられている物語のほんの最初の部分である。この本の後半を読んでしまえば、次に次にと、湧き出る読書欲を押さえることは難しいだろう。

松原 尚寛（人間文化学科 3年）

私たちがまだ幼く
純粋だった頃の思い出のお話

『誕生日の子どもたち』
トルーマン・カポーティ著，村上春樹訳（文春文庫）

もし、あなたが、これからもっともっと年をとって、自分がまだ小さな子どもだった頃のことをうまく思い出せなくなってしまったら、この本を読んでみてほしいと思います。

この本の中には、私たちがまだ幼く純粋だった頃の思い出が無傷のまま、色あせることなく残されているから。

山中 友貴（人間文化学科４年）

推薦図書リスト

『ｱﾙｼﾞｬｰﾉﾝに花束を 改訂版』ﾀﾞﾆｴﾙ･ｷｲｽ ； 小尾英佐訳（早川書房，1989 年）

『大泉ｴｯｾｲ：僕が綴った 16 年』大泉洋（ﾒﾃﾞｨｱﾌｧｸﾄﾘｰ，2013 年）

『置かれた場所で咲きなさい』渡辺和子（幻冬舎，2012 年）

『神と悪魔の薬ｻﾘﾄﾞﾏｲﾄﾞ』ﾄﾚﾝﾄ・ｽﾃﾌｪﾝ，ﾛｯｸ・ﾌﾞﾘﾝﾅｰ ； 本間徳子訳（日経 BP 社，2001 年）

『木を植えた男』ｼﾞｬﾝ･ｼﾞｵﾉ ； ﾌﾚﾃﾞﾘｯｸ･ﾊﾞｯｸ絵 ； 寺岡襄訳（あすなろ書房，1989 年）

『聞く力：心をひらく 35 のﾋﾝﾄ』阿川佐和子（文藝春秋，2012年）

『共存共栄の日中経済：「補完論」による実現への戦略』関志雄（東洋経済新報社，2005 年）

『京大医学部の最先端授業！「合理的思考」の教科書』中山健夫（すばる舎，2012 年）

『建築構造用語事典：学生も実務者も知っておきたい建築ｷｰﾜｰﾄﾞ 108』日本建築構造技術者協会関西支部建築構造用語事典編集委員会（建築技術，2004 年）

『「ご冗談でしょう、ﾌｧｲﾝﾏﾝさん」：ﾉｰﾍﾞﾙ賞物理学者の自伝 1』ﾘﾁｬｰﾄﾞ・P. ﾌｧｲﾝﾏﾝ ； 大貫昌子訳（岩波書店，1986 年）

『古文の読解』小西甚一（筑摩書房，2010 年）

『ｻﾞ・ﾌｧｼﾘﾃｰﾀｰ：人を伸ばし、組織を変える』森時彦（ﾀﾞｲﾔﾓﾝﾄﾞ社，2004 年）

『『坂の上の雲』と日露戦争』（山川出版社，2009 年）

『砂糖菓子の弾丸は撃ちぬけない』桜庭一樹（角川書店，2009 年）

『史記列伝 全 5 巻』司馬遷 ； 小川環樹，今鷹真，福島吉彦訳（岩波書店，1975 年）

『嫉妬の世界史』山内昌之（新潮社，2004年）

『重力とは何か：ｱｲﾝｼｭﾀｲﾝから超弦理論へ、宇宙の謎に迫る』大栗博司（幻冬舎，2012年）

『少年H 上，下巻』妹尾河童（講談社，1997年）

『進化しすぎた脳：中高生と語る「大脳生理学」の最前線』池谷裕二（朝日出版社，2004年）

『人生に前向きになる英語の名言101』寺沢美紀（IBCﾊﾟﾌﾞﾘｯｼﾝｸﾞ，2012年）

『新世界より 上』貴志祐介（講談社，2011年）

『世界級ｷｬﾘｱのつくり方：20代、30代からのく国際派>ﾌﾟﾛﾌｪｯｼｮﾅﾙのすすめ』黒川清，石倉洋子（東洋経済新報社，2006年）

『世界をやりなおしても生命は生まれるか?』長沼毅（朝日出版社，2011年）

『誰のためのﾃﾞｻﾞｲﾝ?：認知科学者のﾃﾞｻﾞｲﾝ原論』D.A.ﾉｰﾏﾝ；野島久雄訳（新曜社，1990年）

『誕生日の子どもたち』ﾄﾙｰﾏﾝ・ｶﾎﾟｰﾃｨ；村上春樹訳（文藝春秋，2009年）

『小さな小さなｸﾛｰﾃﾞｨﾝ発見物語：若い研究者へ遺すﾒｯｾｰｼﾞ』月田承一郎（羊土社，2006年）

『中国 詩心（うたごころ）を旅する』細川護熙（文藝春秋，2013年）

『調理以前の料理の常識』渡邊香春子（講談社，2004年）

『珍獣の医学』田向健一（扶桑社，2010年）

『徒然草』兼好；島内裕子校訂・訳（筑摩書房，2010年）

『徳川将軍家十五代のｶﾙﾃ』篠田達明（新潮社，2005年）

『涙の理由』重松清，茂木健一郎（宝島社，2009年）

『日本人の知らない日本語』蛇蔵，海野凪子（ﾒﾃﾞｨｱﾌｧｸﾄﾘｰ，2009年）

『人間はどういう動物か』日高敏隆（筑摩書房，2013年）

『二十歳までに考えておきたい 12 のこと:現代人の暮らしといのち』
近藤卓編著 ; 米田朝香, 弓田千春著 (大修館書店, 2012年)
『100%好かれる 1%の習慣』松澤萬紀 (ﾀﾞｲﾔﾓﾝﾄﾞ社, 2013 年)
『白夜行』東野圭吾 (集英社, 1999 年)
『広島学』岩中祥史 (新潮社, 2011 年)
『ﾌｧｳｽﾄ 全 2 冊』ｹﾞｰﾃ作 ; 相良守峯訳 (岩波書店, 1958 年) 他
『ﾌｧﾝﾀｼﾞｰを読む』河合隼雄 (講談社, 1996 年)
『松尾芭蕉『おくのほそ道』100 分 de 名著』長谷川櫂 ; 日本放送協会, NHK 出版編 (NHK 出版, 2013 年)
『ﾐﾆﾏ・ﾓﾗﾘｱ:傷ついた生活裡の省察』ﾃｰｵﾄﾞﾙ・W.ｱﾄﾞﾙﾉ ; 三光長治訳 (法政大学出版局, 1979 年)
『村上春樹、河合隼雄に会いにいく』河合隼雄, 村上春樹著 (新潮社, 1999 年)
『ものぐさ精神分析 改版』岸田秀 (中央公論社, 1996 年)
『もののけ姫:完全版 全 5 巻』宮崎駿脚本・監督 ; ｱﾆﾒｰｼﾞｭ編集部編 (徳間書店, 2000 年)
『夜と霧:ﾄﾞｲﾂ強制収容所の体験記録 新装版』ﾌﾞｨｸﾄｰﾙ・E.ﾌﾗﾝｸﾙ ; 霜山徳爾訳 (みすず書房, 1961 年)
『理系なお姉さんは苦手ですか?:理系な女性 10 人の理系人生ｶﾀﾛｸﾞ』内田麻理香 ; 高世えり子絵 (技術評論社, 2011 年)
『論文・ﾚﾎﾟｰﾄの基本:この 1 冊できちんと書ける!』石黒圭 (日本実業出版社, 2012 年)
『ﾜｰｸ・ｼﾌﾄ:孤独と貧困から自由になる働き方の未来図「2025」』ﾘﾝﾀﾞ・ｸﾞﾗｯﾄﾝ ; 池村千秋訳 (ﾌﾟﾚｼﾞﾃﾞﾝﾄ社, 2012 年)
『Y 染色体からみた日本人』中堀豊 (岩波書店, 2005 年)

新入生にすすめる50冊の本 2014
2014年4月1日発行

編集・発行
『新入生にすすめる50冊の本』刊行委員会
〒729-0292
広島県福山市東村町字三蔵985番地の1
福山大学附属図書館

印刷　三原プリント株式会社

福山大学附属図書館
『新入生にすすめる 50 冊の本』刊行委員会